

Y-NAC 通信

リ イ ナ ッ ク っ う し ん



第二号
1995年7月1日
発行

ボ ル ネ 才 特 集



キナバル最高峰Low's Peakにて

世紀末の混沌たる時代の中で

Y-NAC 取締役営業部長

市川 聡

世紀末である。阪神大震災、

うか。

円高不況、オウム騒動と世紀末にふさわしい混乱が続いている。世紀末だからと言ってしまふと身もふたもないが、不況やオウムは、時代の産み出した一つの必然なのだろうと思う。

我々は時代と共に生きてきた。屋久島が世界遺産に選ばれた時、島民が自然と共生してきた結果として、今の自然が残されたというようなことを言われた。一面においてそれは事実であろうと思う。しかしそれが人と自然の共生のモデルのように、美化されると何か面映ゆい気がしてならない。

江戸時代の屋久杉伐採で、一説によると屋久杉の約70%が伐採されたと言われる。白谷雲水峡に累々と並ぶ切株を見て、ある人は屋久杉の墓場だといった。私もそう思う。

江戸時代の人々も、時代の要請を受け、当時の技術を持ってして最大の努力を払って生き抜いてきたことと思う。結果として今の屋久杉の森があるという事実は動かし難い。しかしそこにほんとうに自然と人間の共生の哲学があったのだらう。

歴史に「たら」「れば」は、禁物である。もし江戸時代の伐採がなかったら、もし戦後の小杉谷伐採がなければ、と考えるのは単なる感傷に過ぎない。それはその時代の話してあげる。

過去の時代に否定も肯定もない。残された事実の中でのみ新しい時代が開かれていくのだ。

世紀末という現代に生きるものとして、時代を憂えるよりも、時代の変革者になりたいと思う。この混沌たる時代の中で、屋久島から新しい情報を発信し続けながら。

Y-NAC Science Report No2

ボルネオ特集

はじめに 屋久島からの発想

屋久島の自然の多様性について語るべき、まず語られるのは「亜熱帯（海岸部）から亜寒帯（山頂部）までを含む日本列島の縮図」という話である。これは言い換えれば九州から北海道までの千数百kmを二kmに圧縮し、縦にして屋久島の位置に置いてみるということなので、日本方面から屋久島を見る場合、親近感を持たれやすい考え方だろう。

しかし屋久島はもうひとつ、黒潮沿いにのびる「熱帯の最前線」という性格を併せ持っている。ニューギ

ニアペラなどが現れる魚類相や、サンゴ礁の北限であると同時に、ウラジロエノキやガジュマルなど熱帯性植物の分布の北限であることがそれを物語る。また高温多湿な環境が落葉樹林を成立させておらず、常緑の照葉樹林の上部に常緑の針葉樹林（混交林）が続くという点で、日本の山というよりむしろ熱帯高山の系譜に連なるといえる。つまり屋久島の性格を理解するためには、日本方面からの視点ばかりではなく、熱帯アジアからの視点が必要、ということだ。

花崗岩の貫入という、屋久島とまったく同じ成因で誕生した山であり、その中腹にはほとんど照葉樹林と同じ森や、ヤクスギ林と同じような、針広混交林があり、世界有数のランとシヤクナゲの産地である。つまり屋久島とそっくりなのだ。したがって屋久島で培っている我々の自然観察眼が、少なくともキナバルではそのまま使えるのではないかと、ふんじたのだ。

キナバル山

概要

赤道直下に位置するボルネオ島の北端、北緯六度少々々のところにキナバル（標高四一〇〇M）は聳えている。その姿は遠い沖の船からも見えるため、古くから州都コタキナバルへの海路の目印として重要だったという。山体は屋久島と同じく、貫入した花崗岩塊からなる。その年代は五八〇万年前と屋久島よりも新しい。その容積は、周囲に岩壁をめぐらして屋久島のモッチヨム岳を巨大にしたようなものである。

山頂部は氷河期に存在した氷帽に土壌をすべて削りとられたため、岩盤が剥き出しになっており、森が成立できずにいる。麓からこの見かけの森林限界にかけてはおおむね五層に分けられる植生の垂直分布がみられる。四〇〇〇Mの高さを持つ山はボルネオ島唯一のものであり、周囲から孤立した環境のなかでウツボカズラ、ラン、シヤクナゲなど特異な固有植物群を発達させている。なおキナバル最大の見物は東西の山頂台地をへたてて北に切れ込むローズガリーである。この岩溝は一気に一八〇〇Mも落ち込む深まじいもので、登攀欲をそそるといよりは、圧倒的な高度感に恐怖さえ覚える。

垂直分布

コタキナバルからPHQ公園管理事務所へは、キナバル南面の尾根上の快適なドライブで、見晴らしがよい。海岸から標高七五〇Mないし二〇〇Mまでは、本来なら低地熱帯雨林が分布するはずだが、周囲は焼畑農業や伐採によってすべて開発されており、熱帯雨林の面影は残されていない。北面には比較的広い面積の森が残されているようである。

標高一六〇〇MのPHQは下部山地林に属しており、ようやく森らしくなる。周辺には自然観察路が数コース整備されている。下部山地林は低地熱帯雨林よりも出現種数が多いことが知られている。それはつまり世界で最も多様性に富んだ森ということである。

た、トウゲシバ、クラマゴケ、ヒカゲノカヅラ、ヘゴ、オオタニワタリなど屋久島でお馴染みのコケやシダの近縁種、あるいは同種がつきつきとあらわれる。種の同定を試みる時間の余裕も資料もないのが残念である。カーソン滝のすぐ上からは世界最大の鮮類（ジャイアントモス）ドゥソニアの群生がみられ、ランヤンの上まで分布している。シヤクナゲ類もボツボツ咲いているが、花期はランとともに十一月〜十二月の雨期が中心らしい。動物では、地リスやツバキが東屋周辺に出没する。

ランヤンSQをすぎると、はつきりと森林景観が変化する。基盤岩がそれまでの砂岩からミネラルに乏しい超塩基性岩の蛇紋岩へと代わり、これに適應するヤクスギに似たセリリファイラム（？ガイドのソウディンさんの発音はそう聞こえた）やナンヨウスギに似たダクリディウムなどの針葉樹、可愛い花を咲けるサヤツサヤツやイジュ（沖繩にあるものとは少し違）の優先する「超塩基性岩林」となる。貧栄養のため木の姿がいじけており（ドワーフ化）、という表現がどこかあつたがまさにぴったり。見るからに出現種数が少ない。しかし照葉樹林の上部に針葉樹の混交林があるという構成は湯本氏に教えられた通りまさに屋久島と同じであり、はるばるこれを見に来たと思えば、なかなか感動的なものであつた。林床にはたまに白く美しいネックレスオーキッドが咲く。ピロードウツボなどのウツボカズラも一部で見られたが、登山道の脇には非常に少なくなっているとのこと。

バナランから上は花崗岩地帯で、転石や風化土壌の堆積層がやや厚くなり、超塩基性岩林に比べると森も豊かな印象になる。鮮類類はなおも分厚く着生しておりランも多い。これは岩砕植生とよばれる。ファイロクラドウス（エダハマキ）やサヤツサヤツがけっこう大木になつており、高さも十M程になる。いかに

も熱帯高山らしい雰囲気なのか、巨岩をぬうように急登をゆくと、唐突に森林限界となり、ゆるやかな露岩帯が始まる。

標高三八〇〇Mのサヤツサヤツ小屋周辺の灌木帯を最後に、まとまった土壌が見られなくなる。ウエスト・プラトーは広大な花崗岩の岩盤で、その上にアブドル・ラーマン・ピーク、ドンキイヤーズ、アグリシスターなど氷帽のけずり残しと言われる奇妙な岩峰がいくつもそそりたつ。岩盤上はガスがかかればたちまちどこかに迷い込みそうだが、ルートはサヤツサヤツ手前の森林限界からローズピークまで新しく最近の物らしい太いロープによって示されており、意識的に道を外さない限り迷いようがない。

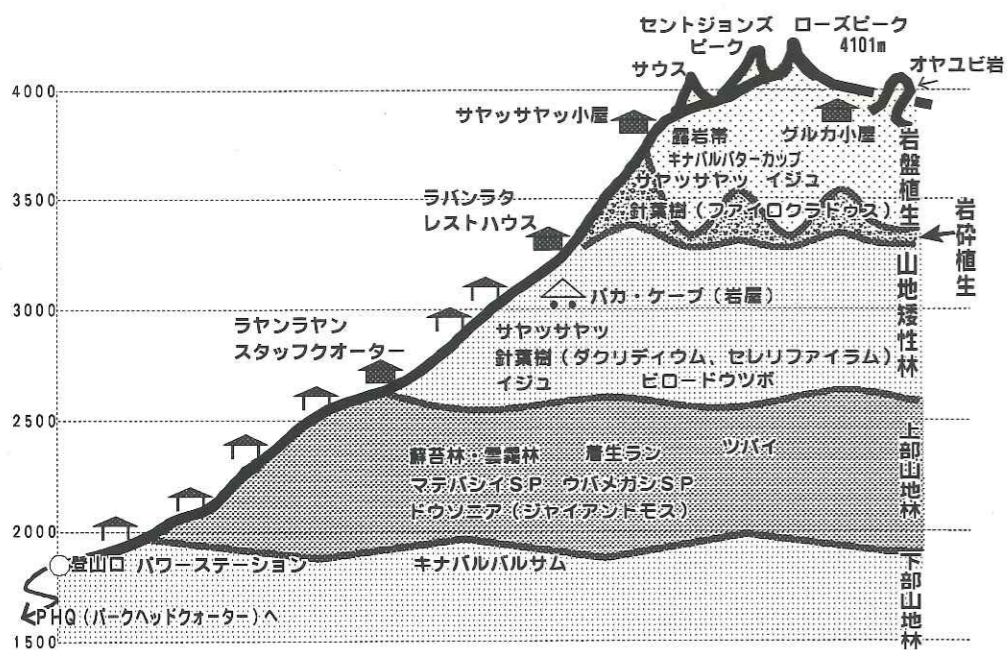
最高峰ローズピークは、周囲の岩峰の中で最も登りやすいピークのように、東面はローズガリーとなつて奈落の底に消えている。

コースは実によく整備されており、歩きやすいが、一八〇〇MのPSから四一〇〇Mの山頂まで実に二二〇〇Mの高度差があり、決して楽な山ではない。下山中に膝を痛めた人をたくさん見かけた。三三〇〇Mのランラタ・レストハウスで一泊し、翌日の早朝登山を下山するのが普通とされるが、植物などを楽しまうと思つたら二泊三日は必要だろう。ランラタあたりから頭痛など高山病の症状がでることもある。

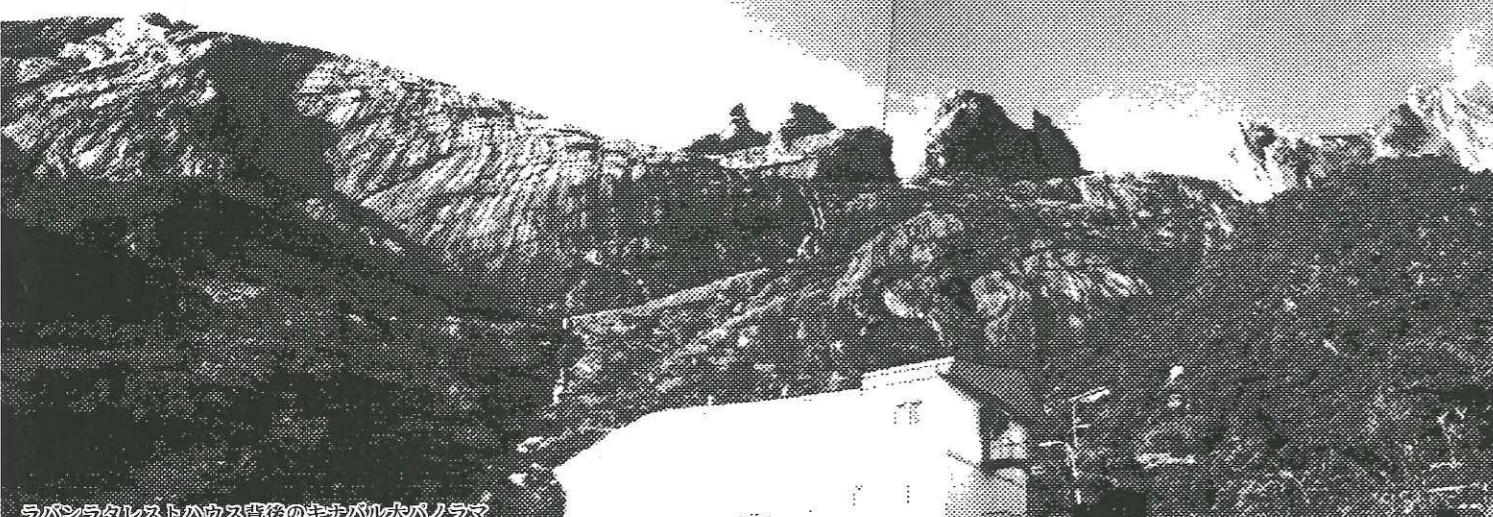
登山にあたっては、登録ガイドの同行が義務付けられている。かれらは地元キナバル周辺に住む山岳民族ドゥスンから採用され、一年間の研修を受けており、動植物の名前などについての質問には、かなり詳しく答えてくれる。優秀な人がガイド会社に引き抜かれることもあるらしい。ただし大多数のガイドはそれ以上の生態学的な知識はあまり無いようである。登山をリードし、解説を入れてくれるような積極的なものではな

花崗岩の貫入という、屋久島とまったく同じ成因で誕生した山であり、その中腹にはほとんど照葉樹林と同じ森や、ヤクスギ林と同じような、針広混交林があり、世界有数のランとシヤクナゲの産地である。つまり屋久島とそっくりなのだ。したがって屋久島で培っている我々の自然観察眼が、少なくともキナバルではそのまま使えるのではないかと、ふんじたのだ。

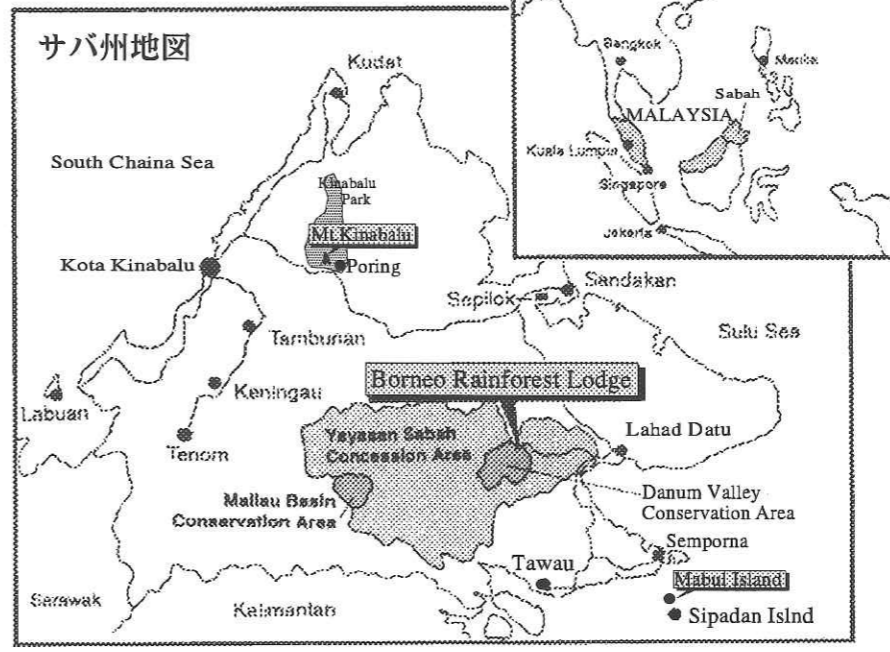
研修の内容は、①キナバル登山 ②マブル島・シバダン島ダイビング ③ダナンパレー自然保護区というもので、これはY-NACエコバック：ボルネオ編ともいべき内容であり、一〇日間という短期間ながら密度の高い充実したものとなつたと思う。以下にその概略を報告する。（小原）



この断面図は、山頂から下へ約4000メートルの標高差を示しています。下部山地林（1500-2000m）にはヤクスギやランヤンが、上部山地林（2000-3000m）にはシヤクナゲやランヤンが、山地矮性林（3000-4000m）にはシヤクナゲやランヤンが優勢です。また、山頂付近には超塩基性岩林やドワーフ化した植物も観察されます。



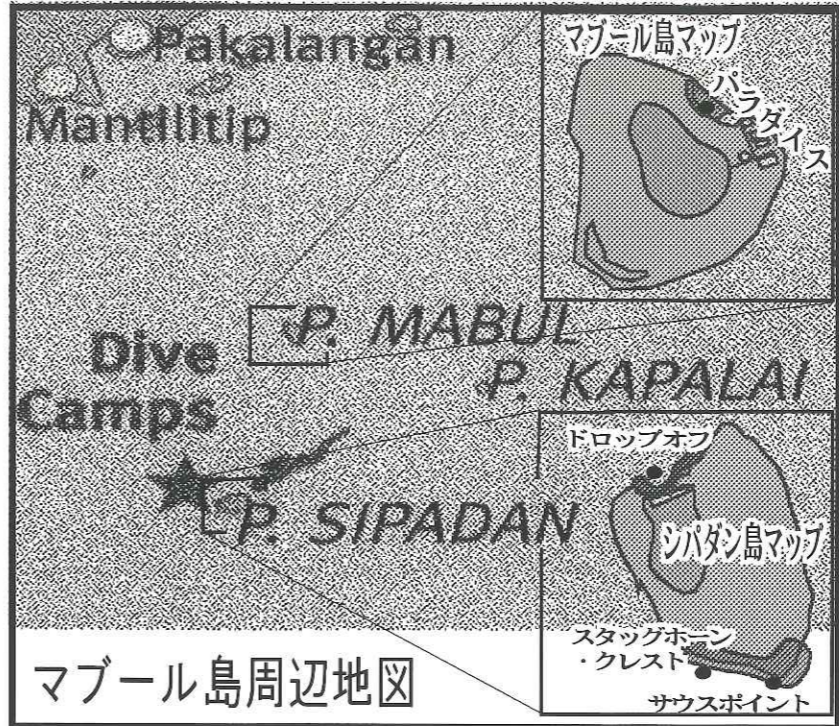
ランラタレストハウス背後のキナバルパノラマ



マブール島

く、どちらかというところ、万一のときの用心のために、ついでに同行してくれたソウディンさん(三十六才)は、忙しい月には十二〜十三回は登るとのこと。一回が二泊三日以上だから、ほとんど休みなしでマブールに登っていることになる。バリバリやっつけては体が保たないだろう。

コースの途中には要所に東屋があり、雨を避けられる。ラバンラレストハウスのレストランは広いテラスの快適なものでビールも飲めるし料理も悪くない。レストハウスの職員もポーター(二十才すぎくらいの子)の子がほとんど。もすべて地元採用のドゥソンの若者である。入山、宿泊、ガイドの手配などすべて事前に予約が必要で、ほかにも小屋はあるものの、ラバンラ・レストハウスの宿泊定員五十六人が、実質的な入山制限になっていると思われる。(小原)



マブール島に対する期待は、熱帯の魚類と屋久島の魚類が比較的似ているのではないかとこの予想が確認できることであつた。以前ある書物で「西部太平洋の魚類はオーストラリア北部辺りの海で発生分化した魚類が起源である」という記述を読んだことがある。そして、マレー半島で東西に分岐し、東は西部太平洋へ広がり、西はインド洋を横断し、紅海にまで分布を広げたという。確かに紅海の魚類は、西部太平洋の類によく似ているものが多い。西へ向かったものはまたいずれ確認にいたつたその原産に近い赤道付近の太平洋へと広がっていったその原産に近い赤道付近の魚類と屋久島の魚類との関係について考えてみたかったのである。クアラランプール空港のロビーにあつた水槽の魚を見るかぎりほぼ屋久島で見られる魚類と変わらなかつた。その時点で屋久島と琉球列島と大して変わらないのではないかとこの予感があつた。

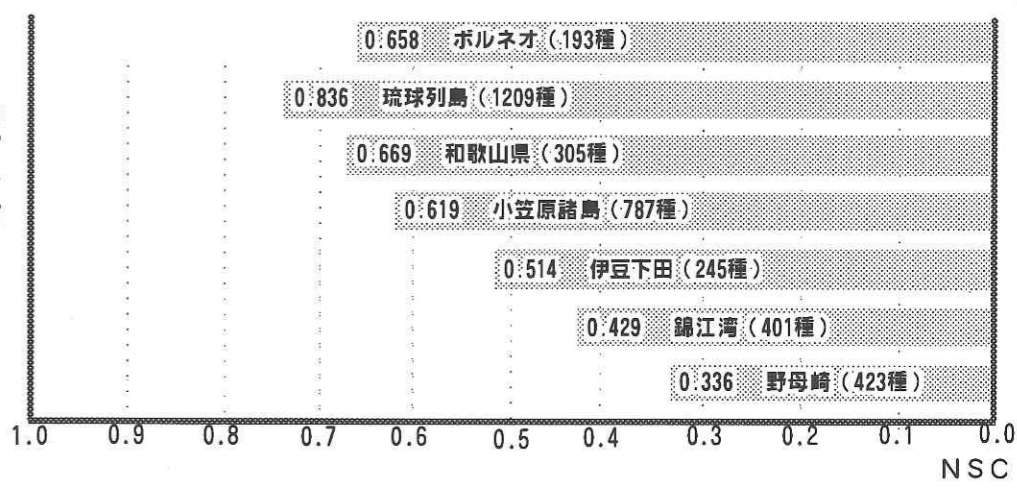
今回潜ったポイントは、マブール島「パラダイス」、シパダン島「サウスポイント」、「スタックホーン・クレスト」、「ドロップオフ」、カパライ島「カパライ」の5ポイント。マブール島「パラダイス」は、リゾートの真ん前でリーフと砂地の境のポイントである。屋久島でいうなら「津森海岸」や「元浦」に似ている。水深も比較的浅く、内湾的環境である。そのためシパダンのポイントに比べると透明度が少し落ち、外洋性の魚類が見られない。ここで特徴的に見られたのはテンジクダイの仲間、ヒメジの仲間、ハゼの仲間の内湾性のものなどである。

シパダン島は大陸棚のエッジにあたり、水深数千mのセレス海崖の上に位置する。「サウスポイント」「スタックホーン・クレスト」は潮通しが良く、大型回遊魚やウミガメ等の宝庫となる。島を囲むリーフはサンゴがよく発達し、リーフエッジから数百mのドロップオフとなっている。バラクーダやギンガメアジの大群やアオウミガメなどを見ることが出来る。

カパライ島は、マブール島より砂地で繋がったサンゴ州島と思われ、干潮時にわずかに頭を出す程度だが、かなりの面積の州島である。生物相ではネジリンボウ・バラオクサビライシなどが特徴的に見られた。

今回限りのデータだけでは何とも言えないところがあるが、屋久島と日本各地の魚類相を比較検討したときに使用したNSC指数(野村-シンブソン指数)による類似度で比較検討してみよう。まず、今回のダイビングで確認した魚種数は193種類(内標準和名の付いていないものは15種。屋久島産魚類は580種。両地域に共通する種は127種。NSC=127/193=0.658)となる。

屋久島と日本の他地域を比較した類似度は次の通りであつた。



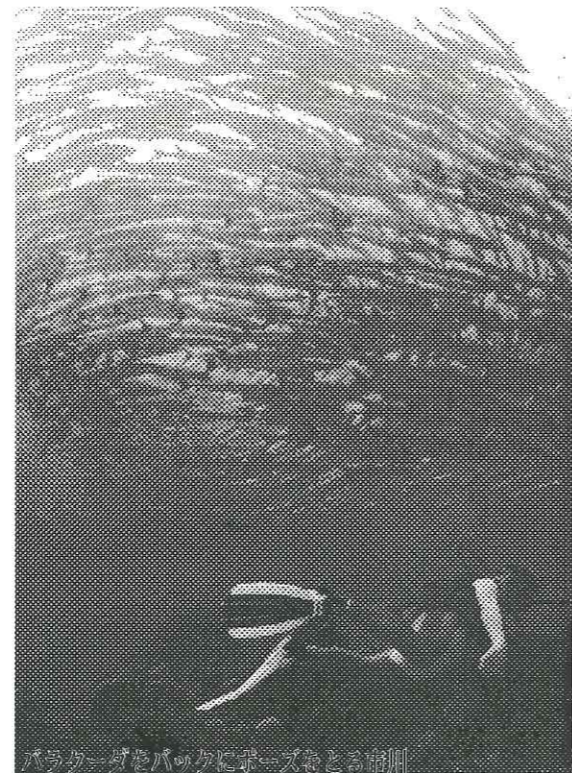
NSC = c / b, a > b : {0 ≤ NSC ≤ 1}

a, b : 比較する両地域に生息する総種数

c : 両地域に共通する種数

図の種数は、各地域の総種数を、数値はNSCを表す。

野村-シンブソン指数(NSC)による他地域の魚類相との比較 (4)



パラカゲをバックにポーズをとる市川

大な林道は、Karasan Sabah Concession Area に設けられた伐採道路で、伐採跡地やユーカリの植林地の中を抜けていく。途中に点々と聳えているのは、大きいものでは樹高80m(松峰大橋の高さに匹敵する)にもなるというボルネオ最大の木、メンガリス(マメ科)である。あまりにも堅く重く、切り倒すと割れてしまったため伐採を免れていると言ふ。スムーズな樹肌は遠目にも美しく、さながら屋久杉の森の紅一点ヒメシヤラのようである。

いよいよ保護区内へと入る分岐を左へと曲ると、わかにかうつそうとした熱帯雨林となる。ボルネオの熱帯雨林で最も優占しているのは、60mの高さになるフタバガキ科の樹木である。屋久島では縄文杉でも高さ約30mに過ぎない。なぜこのような超高木になりうるのか信じられない思いがするが、逆に言うと屋久島の木がいかに台風で倒れているかということである(赤道直下のボルネオには台風が来ない)。またこの超高木にとりついていての締め殺しイチジクの仲間があるのだから熱帯雨林はスケールが大きい(縄文杉ほどの太さを持った高さ60mもあるアコウを想像してもらいたい)。

BRFLは、一九九四年七月に保護区内に建てられたエコツアーのための拠点リゾートである。ダナン川のほとりに建てられたロッジは、全て高床でできており、朝晩は涼しく、思いの外快適であつた。荷解きをして、ベランダに出て見ると、隣のシャレーで双眼鏡を覗いていた小原が「川にワニがいる!」と叫んでいる。冷静な小原の声が少し上擦っていたことをとってみても、熱帯雨林のビククリ箱的要素が理解できると思う。このワニ騒ぎで大いに盛り上がったが、あとで聞いたところ(このあたりにワニはいない)のこと。水辺に棲む

ズオオトカゲであつた。このBRFLでは、専属のガイドによるトレッキングツアーが行なわれており、日程にあわせて様々な半日ルートを組み合わせたプログラムを作成してくれる。風葬跡や展望台からの展望を楽しむCOFFIN CLIFFトレイルや、キャノピウォークを取り入れたトレイルなどがある。

ダナンバレーで最も期待していたのは、熱帯雨林の多様な野生動物との出会いである。オランウータンやスマトラサイ、アジアゾウなど二〇〇種もの哺乳動物、サイ鳥など二五七種以上の野鳥、ミスオオトカゲをはじめとする七〇種以上の虫類、無数の巨大なダンゴムシやヤスデ等々が森の中に蠢いているのだ。屋久島の動物相の少なさが際立ってしまう。今回のツアーでは、七種の哺乳類、一九種の鳥類、数種のトカゲとヘビを見ることができた。

しかし、見通しの悪い熱帯雨林の中で、実際に大型動物に出会うのは難しい。比較的容易に出会えるヒゲイノシシやカニクイザル、マメジカなどを除くと、むしろ出会えれば幸運と考えた方がよいであろう。それでも随所に見られる真新しいオランウータンのベッドや巨大なゾウの足跡は、充分に想像力をかきたててくれる。

また夜光性の動物を見るためのプログラムとして、ナイトウォークやナイトドライブが用意されている。今回のツアーでは、マメジカの目、オオアカムササビ、リスの仲間などしか見ることが出来ず、さかさ拍子抜けだったが、ゾウやサイが見られることもあるというから期待は大きい。

動物を見ることに主眼を置かなければ、日中は昼寝でもして、早朝や夕暮れ時に絞ってツアーを行なってもいいかもしれない。

もう一つの目玉は、キャノピウォークとツリータワーである。

キャノピウォークとは、地上約二〇〜三〇mの高さに設けられた吊橋の上を巨木から巨木へと渡り歩き、地面からでは何れも知れない樹冠部の自然を観察するものである。ポリー温泉にも同様の施設があり、熱帯雨林のエコツアーには欠くことのできないものとなっている。この高さまで来ると、地上からは見えないものが見えてくる。無数の着性植物や樹冠の上を飛びかうサイ鳥、またオランウータンのベッドも下から見上げるより上から見下ろす方がはるかにリアリティ

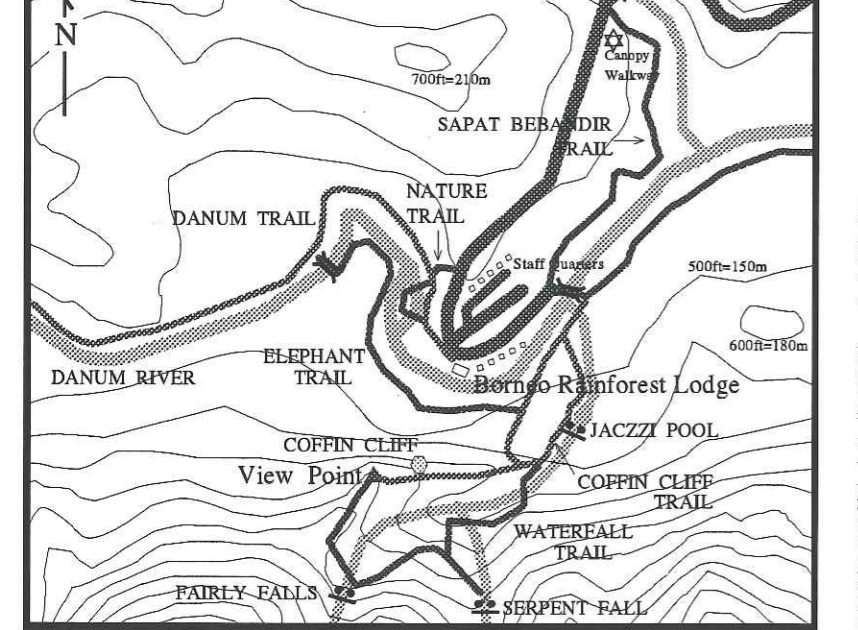
ダナンバレー

どこまで行ってもハイウェイという感の強い幹線道路を外れ、ダナンバレー自然保護区(DNAC)へ向かう砂利敷の林道へと入った。埃っぽい道を、いきなりオオトカゲが横切り、度胆を抜かれる。いやが上にも期待が高まる。

この林道を走ること二時間、約八〇〇先に目指すボルネオレインフォレストロッジ(BRFL)がある。この長

BRFLは、一九九四年七月に保護区内に建てられたエコツアーのための拠点リゾートである。ダナン川のほとりに建てられたロッジは、全て高床でできており、朝晩は涼しく、思いの外快適であつた。荷解きをして、ベランダに出て見ると、隣のシャレーで双眼鏡を覗いていた小原が「川にワニがいる!」と叫んでいる。冷静な小原の声が少し上擦っていたことをとってみても、熱帯雨林のビククリ箱的要素が理解できると思う。このワニ騒ぎで大いに盛り上がったが、あとで聞いたところ(このあたりにワニはいない)のこと。水辺に棲む

ズオオトカゲであつた。このBRFLでは、専属のガイドによるトレッキングツアーが行なわれており、日程にあわせて様々な半日ルートを組み合わせたプログラムを作成してくれる。風葬跡や展望台からの展望を楽しむCOFFIN CLIFFトレイルや、キャノピウォークを取り入れたトレイルなどがある。



BORNEO RAIN FOREST LODGE - TRAIL MAP (5)

おわりに

これだけ世界各地への旅行が盛んな時代で、料理とホテルと買い物ガイド記事は焚火をしてご飯が炊けるほどあるにもかかわらず、実際そこに行ったとき役に立つその土地についての日本語の解説書、とくに自然に関するものは当惑するほど少ない。ボルネオにいても、事前に入手して多少なりとも調べものをする事ができた日本語の参考書は、数えるほどもなかった。

となると、とりあえず頼りは英文資料である。事前に送ってもらったパンフレット、あるいはキナバルのHQやダナンバレーのロッジで手に入れた解説書類を、英和辞典を首つ引きでなんとなく見当を付けつつ、アカウミガメの歩みで読み進んでゆく。昔まじめに勉強しなかった報いとはいえず、日本語への通訳あるいは翻訳があればこんなに時間を無駄にせずに済むなああとつくづく思う。だいたい日本で東南アジアの熱帯雨林の危機を考へるには、東南アジア熱帯雨林の生態に関する確かな日本語がリアルタイムで必要なのだ。できればそういう動きをガイドとして実行してゆきたいものである。

ところでそういった英文の参考書類を読みすすめてゆくと、日本人としてぶつかるところがある。サバ州のいわゆる観光地について、どこのどの資料を読んでも、必ずといっていいほど「旧日本軍のした事」につながるものが姿を現すのだ。まったく肩身が狭いことといったらない。また、熱帯雨林の伐採木はほとんどがラワン材などとして日本に送られる。キナバルの裏には巨大な銅鉱山があり、洗鉱用の巨大な溜め池がつくられ、排水が川を汚染している。現代の日本もまた、世界中に対し個人の印象などはほかにこえた巨大な影響力を持つているのだ。良いことであれ悪いことであれ、これから訪ねようとする国について、我々の父祖、我々の国がその国とどう関係にあり、どんなことをしたか知っておくという事は、少くともその国に対する最低の礼儀というものだろう。

それにしても、屋久島とボルネオ、思い付きのように旅だった研修だったが、その関連の強さは実感できた。ボルネオは屋久島の自然を理解していく上では重要な場所のようである。(小原)



本松が、松ぶと喜えま捕をデヤも大に何松
！災いで、おわれ。すに喰ルヒも手も3匹だけ

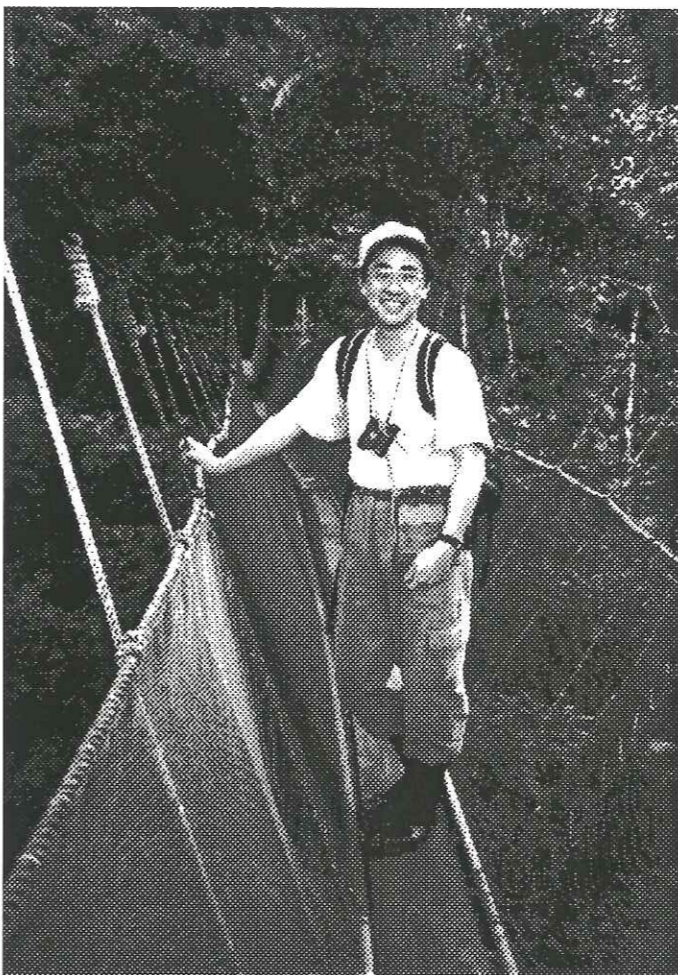
イを感じられる。
ツリータワーは、ここから約三六三離れたもう一ヶ所の利用拠点であるダナンバレーフィールドセンターにある文字通りフタバガキ科の巨木のタワーである。ボルネオの巨木には下枝が全くなく、巨大な電柱のようなもので、登るとなると大変である。メンガリスの木の上にミツバチの巣が多いのも、マレーグマがよじ登れないからだと言われている。

このフタバガキ科の巨木には、高さ約四〇〇mの所に小さなプラットフォームが設けられており、そこまで垂直の梯子を登って行かなくてはならない。天柱石に梯子をつけてつべんに登るようなものである。ママな松本が段数を数えたところ一六段もあつた。手に汗握る梯子登りで、登ると展望は良く、達成感は何れも、途中で暢気に自然を眺めていると手がしびれてくるので、じっくり垂直分布を眺めながら登る余裕はなかった。とにかく高所恐怖症の方や腕力に自信のない方にはお勧めできない。

今回は二泊三日の滞在で、キャンピウォークとツリータワーを含めた四コースのトレッキング、そしてナイトハイク、ナイトドライブを体験した。そのスケ

ールの大きさ、動物を見ることの困難さ、ヒルの多さからして、やはり熱帯雨林は手強かつた。その中でカントリースングのように陽気なカツウの歌声、暗闇に浮かぶクリスマスツリーのイルミネーションのような発光虫の飛翔、谷に響き渡る豆腐屋のラッパのようなセミの声など独特の音と光が熱帯雨林を強く印象づけてくれた。外れても外れても宝くじを買ってしまうように、どうしてももう一度訪れてみたいのが熱帯雨林なのかもしれない。(市川)

(注) Kayaman Sahau とはサバ州の約1/7を占める面積(約一〇〇〇km²)の熱帯雨林について伐採権をもつ地元の財団のようなもので、サバ州の熱帯雨林破壊の元凶と目されている(我々日本人も人のことは言えないが)。そうした批判をかわすために、設けられたのがダナンバレー自然保護区であると言われている。ダナンバレー自然保護区は屋久島の約八割(約四三八km²)すなわち屋久島の国有林に匹敵する広さを持っている。またこの面積はサバ州に残された熱帯雨林原生林の約一〇％にあたるとも言われている。



小原のこんなさわやかな笑顔はボルネオならでわだ。
ポーリン温泉のキャンピウォークにて

屋久島久候症候群

前号で紹介したKさん他四名の症状はなおも悪化し、なんとN—NAC(にわか野外活動センター)なる患者法人を設立されたとのこと。送り付けられたお手製N—NACパンフレット(Y—NACパンフをまねたというパロディというか)の、幻覚症状と戦う日々をわざわざ回顧したよ

うな内容に、我々一同感動と同情の涙というが大笑いというかの幸せな午前中を過ごしました。より一層の悪化をお祈りしたいものです。のう津輕屋。

ところでこの欄の登場人物(患者さん)をイニシャル表記にする必要はまったくないのではないかと、ご指摘をうけましたので、それもそうだと、必要に応じて本名をばらしてしまいうことにしました。

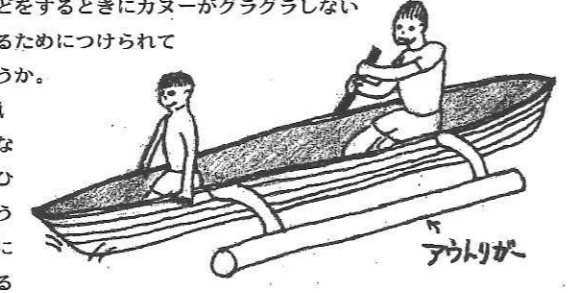
今回の症例としてご紹介するのは、横浜の大書店、有隣堂の生涯学習部です。七〇〇人を越える社員のうちわずかに7人のスタッフとは、Y—NACよ

アウトリガーとエスキモーロール

マプール島へ行く途中に、現地のカヌーを見かけた。どれもアウトリガーがついており、安定したひっくり返りにくい作りになっている。一方、エスキモーは、アウトリガーをつけてカヌーをひっくり返りにくくする代わりに、エスキモーロールという技術を用いて、ひっくり返ってもすぐに起き上がるという対応を取っている。

いままでは、冷たい海に住むエスキモーは、絶対にひっくり返らない方が良くて、南の海のカヌーはひっくり返っても、また起き上がればよいんじゃないかと思えて、不思議でならなかったのだが、ボルネオの海ではじめてその理由が解ったような気がした。

海上コテージの存在が証明するように、とにかくこのあたりの海は静かなのである。台風のような大時化が来ないということは、基本的に海が安全であると考えられる。従って、アウトリガーは、ひっくり返らないための安全装置というよりは、釣りなどをするときカヌーがグラグラしないよう、快適性を高めるためにつけられているのではないだろうか。



親子、材料を置く

一方、北の海では嵐は命取りになりかねない。ひっくり返る、ひっくり返らないという以前に、嵐が来る前に安全な場所に避難することが何より重要となる。そのためにはスピードこそが、命となる。従ってアウトリガーのような、抵抗を大きくする装備はつけられないし、万一ひっくり返った時には、エスキモーロールで素早く起き上がるのが最も安全な対応なのであろう。

快適性を求めて進化した南のカヌーと安全性＝スピードを追求して進化した北のカヌーのそれぞれがいきついたのがアウトリガーとエスキモーロールだったのである。(市川)

有隣堂カルチャークラブパンフレット

有隣堂カルチャークラブ

屋久島の森を往く 雲霧の沢を往く

「屋久島」の魅力を伝えるためのパンフレットです。自然の美しさや歴史を詳しく紹介しています。

※お問い合わせ先: 有隣堂 生涯学習部 045-777-1111

りましとはいえないかなりの零細セクション。しかし主催する有隣堂カルチャークラブの講座は実によく選りぬかれたもので、我々も首都圏に住んでいたら受講したいものばかりです。国内の自然系の講座に限ってみても、大雪・知床・白神・三宅島・長良川・四万十川・沖縄のヤンバル・西表と優れたフィールドの確かなガイドを配置するというポリシーが貫かれており、その言葉こそ使っていないが、実質的にエコツアーを全国で展開している現在唯一の団体かも知れません。(…シンドロームなのに宣伝のしすぎ、という指摘がありそうですが、

これは前置きというものです。(7)

光栄にも屋久島のY—NACもがカタログにならんでいるそのわけは、屋久島担当の土橋さんが感染者だからです。一見症状は軽いのですが、慢性で伝染性が強いタイプであるうえに本人の行動範囲が広いので影響が大きいです。なお二次感染者の症状は軽いとは限らないことがわかっています。

現在Y—NACには、ボルネオ症候群を発症したものが若干名ありますが、土橋さんなども潜伏期にあるらしく、合併症の発症は時間の問題のようです。(小原)

Y N A C 特選

コースガイド

その② 津森海岸「ダイビング」



宮之浦から一澳方向へ車で五〜六分走ると六〇〇m程の一直線の道路になる。直線の中程までは下り坂でまた一気にかけ上がる。見通しのいい直線なのでつい時速八〇kmを越えてしまう。その坂を登りきると津森の湾が見えてくる。浅い砂地の海底が海をエメラルドグリーンに染め、思わずきれいだなぁと思ってしまう。

今回はこの津森の海を紹介する。

屋久島では数少ない内湾である。全体は砂地であるが、東面に岩礁がありサンゴが点在する。

湾が北西に開いているので、風向きが北西のときは多少波が入ってくるが、それ以外の風には強く、たいてい穏やかな海となる。また、潮流や深みもなく、安心して遊べるポイントである。

この一帯は「津森石」と呼ばれる良質の硯石を産出する堆積岩であるが、岩盤上に発達したサンゴのため珊瑚

礁の様を呈する。干潮時には水面上に露出する部分が多い。内湾で穏やかな為か屋久島を分布の北限とする単体自由生活型サンゴのクサビライシ類の群落がある。全体に浅く明るい海なので、スノーケリングや初心者向けポイントである。

残念なことには県道から浜へ下りる道が悪路であるため、気軽に行けるところではない。車で下へ下りる時は事前に道の状態を歩いて確認してからにした方が無難である。私も何度か散々苦労をして何とか車を上げたことがある。

コースガイド

① エントリーポイント。
ゴロタ石の浜なので足元に注意が必要。ゴロタ石は波打ち際から十数mで砂地へ変わる。干潮時はゴロタ石の上を歩いて行けるが、満潮時は丁度ゴロタ石の上で波が砕けるので足元が見にくく特に注意が必要。

砂地のなかに小さな岩礁が点在し、小魚が付いている。ゴロタ石を抜けた辺りの砂地は満潮時でも水深が一・五m程度なのでスノーケリングの練習にも最適な場所である。

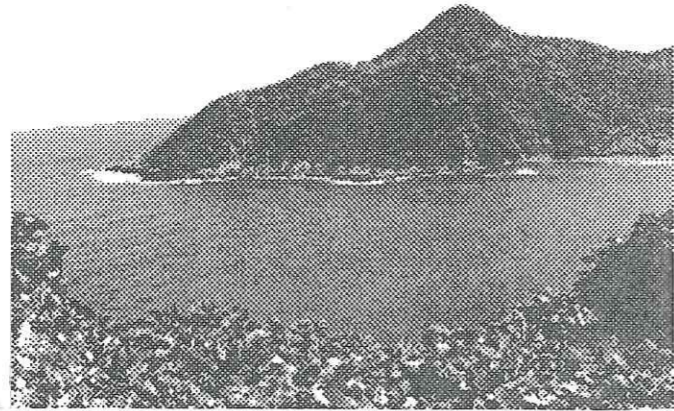
② サンゴ礁

岩礁の上にはハナヤサイサンゴ類やシヨウガサンゴ類などの小さな群体が点在する。クギベラやコガシラベラなどが滑るように泳ぎ回っている。岩場の下側には、ハリセンボン、ミノカサゴの仲間、クロメジナの群などを見ることが出来る。

水深も浅く、サンゴや魚を観察するには最もおもしろいところである。



⑤砂地に現れたマダラトビエイの若魚



③ 第二のエントリーポイント

①に波がたつたときはこのエントリーポイントを使う。岩礁が防波堤の代わりになりここはほとんど波が入ってこない。この通路はじっくり観察するとヘコアユやミナミウシノシタの幼魚など思わぬ生き物を見つけることができる。

④ 大王岩

砂地の中に塔のように突き出した岩が大王岩である。大王岩はハマサンゴに覆われた三mほどの塔状になった岩で、オヤビッチャやキンギョハナダイなどが群れている。初夏から秋にかけては、この大王岩の周りをキビナゴ・キンガメアジの幼魚(エバ)・シ

マアジの幼魚が付いていて楽しませてくれる。この一帯にはスジウミバラ・オオハナガタサンゴなどの群落があり、タジマヤッコ・サザナミヤッコなどのカラフルな魚達を見付けることが出来る。

⑤ 砂地

広々とした砂地が広がる。ヤッコエイが多く、突然砂地から泳ぎだし驚かされる事がある。岩礁付近の砂地では、ミナミアカエソやオビテンスモドキの幼魚を見ることが出来る。砂地に太陽光がきらきらと輝き、ただ浮遊しているだけ幸せな気分になれる。

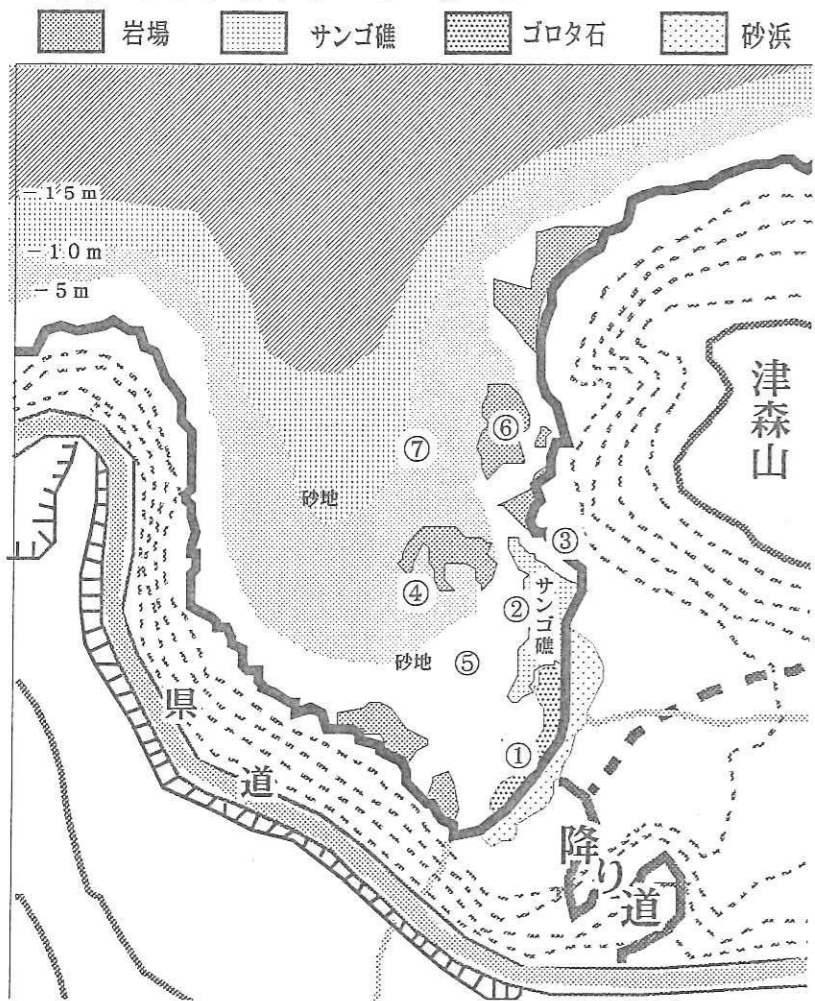
⑥ 沖の瀬

台状になったリーフで、回りは水深二〜七mでリーフ頂上は二m前後となる。棚の頂上部では、スズメダイの仲間やベラの仲間が多数見ることが出来る。棚の斜面では、ヤエヤマカワラサンゴやナガレハナサンゴ等が群生している。リーフの北端にはクサビライシ類の大群落があり、着生している状態やポリプを出しているものなどが観察できる。

⑦ 沖の砂地

水深が一〇〜一二mくらいの砂地。砂地には、あまり

津森海岸マップ



生物は発見できないが、ミナミウシノシタやホウボウなどを見つけた時は格別嬉しくなる。ポツポツと点在する小さな岩場のフタスジリュウキユウスズメダイでもからかいながら砂地の生き物を探して見よう。

モデルコース

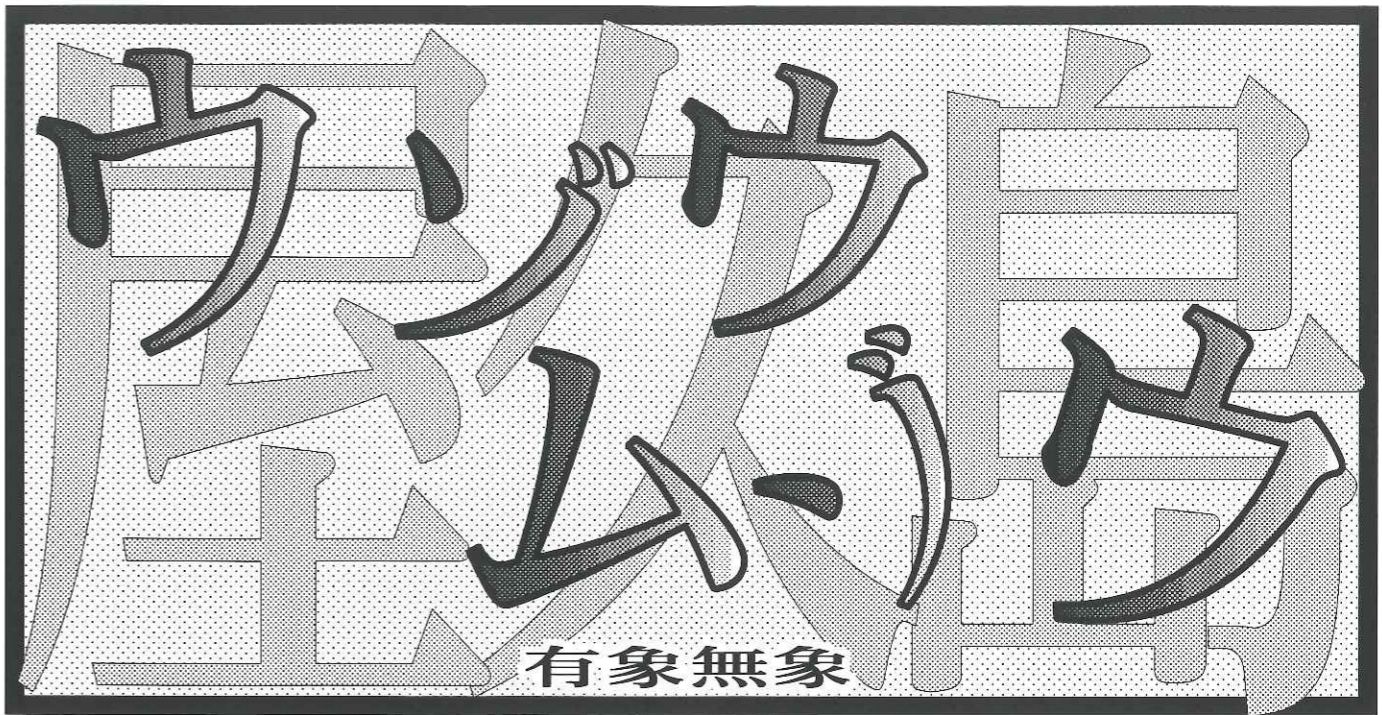
☆スキューバダイビングによるフィッシュウォッチング
1ダイブ ①→②→④→⑤→①
2ダイブ ③→⑥→⑦→④→③
☆スキンドайビング

自然観察

浅くて流れのない入り江なのでじっくりと生物観察ができる。サンゴ礁や砂地など環境の違いと生物の適応の仕方や求愛行動、捕食行動などをじっくりと観察できる。

適期：オールシーズン。ただし、冬場の北西の季節風には弱い。(松本)

①→②→④→⑤→①



クマノミ半蔵

元浦のポイントに「半蔵」と名付けたクマノミがいた。クマノミは体に白帯の隈取りを持つことから「隈の魚」(学名 *Amphiprion clarkii* 英名 Goldbelly anemonefish) と名付けられたスズメダイ科の魚である。「半蔵」はこの白帯が半分しか無いので容易に固体識別ができる。

クマノミは半年前の環境を記憶していたという実験結果があるほど素晴らしい記憶力を持っている。ずいぶん通ったので「半蔵」も私を認識したのかお客さんと観察していても必ず私の前にやってくる。といっても決して仲がよかったわけではない。むしろ、また嫌な奴がきたと思って追い払いにきているのである。ある時、遠くから私を見付けるとすっこんできて目の前を右へ左と泳ぎ回り、睨み付けては「ボクボク」と音を出して威嚇するのである。うるさいので手で払いのけるがすいすいとかわして執拗にまとわりつく。だいたいこんな時はイソギンチャクの影に卵を持っている。「よし、卵の観察だ」と住家としているイソギンチャクに近づいていったときである。とうとう「半蔵」の堪忍袋の緒が切れたのか、私のおでこをがりつつかじつたのである。「いてっ!」と思わず水中で叫んでしまった。また、これを見ていた回りのお客さ



卵の面倒をみる雄のクマノミ

んが「グファイ、グファイ」と水中で爆笑していた。これ以来、私も「半蔵」には一目置くようになった。これまで数多くのクマノミを見てきたが「半蔵」ほど気の荒い奴は他に見たことがない。多くのクマノミは、卵もほったらかして岩影に逃げ込んでしまうのに。

この「半蔵」、五年ほど喧嘩をしながら付き合ったが、突然姿を消してしまった。 (松本)

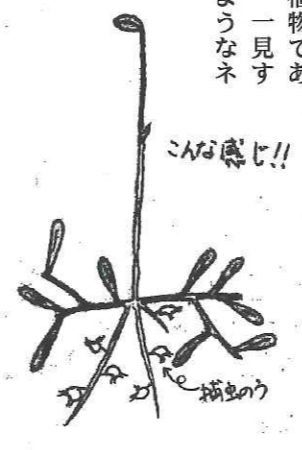
ムラサキミミカキグサ

私は耳掻きが好きである。家でくつろいでいるとついつい耳掻き棒に手が行ってしまう。自分の耳だけでは物足りなく、逃げる子供に頼み込んで耳を掻かせてもらっている。颯太の耳にこびりついた巨大なミミクソを、そっと掘り出す瞬間に、思わず生唾を飲み込むのは私だけだろうか。

ところで湿地帯にはえるミミカキグサという植物がある。このうち屋久島で見られるムラサキミミカキグサは、学名を *Utricularia yakushimaensis* といい、まさに屋久島のミミカキグサである。

ムラサキミミカキグサは、夏になると細く立ち上がる花茎の上に紫色をした可憐な花を咲かせる。花が落ちると、花茎の先に頭が残り、ちょうど耳掻き棒そっくりとなるので、ミミカキグサと呼ばれているようだ。北海道にもはえていたの、なんとなく親しみを感じる草花だ。

ミミカキグサの仲間には、花でも咲いていなければ、余程のマニアでもなければ目にすることがない小さな植物であるが、実はモウセンゴケやウツボカズラと同じ食虫植物である。しかしこの植物、一見するとモウセンゴケのようなネバネバと虫を絡めとる葉もなければ、ウツボカズラのような仰々しいミズシシ状の落し



〈10〉

穴も持っていない。もちろん耳掻きで虫をすくい取るなどの芸当は持ち合わせていない。

その秘密は地下にある。もともと水溜りの泥やミズゴケの中にはえているので、茎は水の中に拡がっているような状態となっている。この茎に捕虫囊と呼ばれる透明な小さな袋がついている。袋の口のところにはえている毛に、ミジンコのような小さな動物が触れると、袋の弁が開いてスポイドで吸い上げるように、たちまち袋の中に捕まえてしまうのだ。可愛いからといって甘く見ていると痛い目をみるいい例だ。(市川)

椰子の実

ココヤシは、海流によって分布を拡げる海流散布植物の代表格だ。

自生のココヤシの幹は海に向かって傾いて生育することが多いが、それは果実を陸ではなく海に落とすためなのだ(未確認情報)。果実は「存じの」とおり、直径二十五センチを越える大きなもので、中心にある種子は、非常に堅い殻(内果皮)と、そのまわりの繊維とコルク質が入り混じったような分厚い中果皮に包まれており、耐水性、耐肉食性、それに浮力を持っている。母樹からポチャンと落つこちたヤシの実、ドンブラコと果てしない海の道へ乗り出すのだ。

ところでこの内果皮、あまりに堅く頑丈すぎて種子が突破



椰子の実

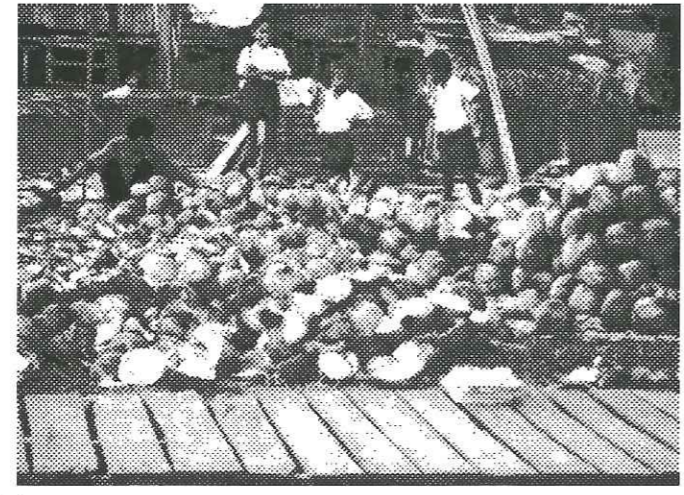
できないほどのしるものである。やむなくココヤシは、発芽孔とよばれる弱点を用意しなくてはならなかった。海に浮いているとこの発芽孔から確実に腐敗菌が侵入してしまう。そのため果実の浮力は二年以上保たれるのに、発芽能力は数カ月しか維持されない。それがヤシの実のドンブラコ・サバイバルに許された時間ということになる。

ヤシの実の漂着は日本でも昔から知られており、内果皮をひしゃくしたり、お椀にしたりしている例がある。屋久島の海岸にも、ココヤシの実の殻が打ち上がっている。ココナツジュース(胚乳液)目当てに比較的しつかりしたものをさばいてみても、ちょうど頃合に腐敗した白濁液になっているのがオチである。一九九一年に安房の春田海岸で発芽したのが見つかったが、与論島以南でないと生育は無理らしい。

半分に分かれた果皮部分もよく打ち上がるが、これは東南アジア方面で種子が利用されたあと捨てられたものだ。ボルネオのマブル島ではその現場を見ることができた。この小島は全島ココヤシのプランテーションで、高さ二十メートルを越えるココヤシの木々には登るためのステップが切つてある。下生えとして屋久島が分布の北限とされるスナズルが繁茂している。朝島を散歩していると、村外れに五百個くらいヤシの実が転がっており、コブラ(胚乳。いわゆるココナツ)を採るのだろう、おじさんが一つ一つそれを鉈で割っていた。制服姿の小学生が何人かまわりでチョロチョロして、たまにコブラの切れ端をもらってうれしそうに食べていた。

ココヤシ分布は熱帯太平洋全域と広い。自力で海を渡る能力もさることながら、何週間炎天下にさら

され潮をあび続け、中身のジュースとコブラはまったく変質しないという優れた保存食糧だったために丸木舟の航海に用いられた。太平洋全域に拡がったという点も重要である。起源は研究者の間で熱帯アメリカという説と東南アジアまたは太平洋という説とがあり、決着していないようだ。(小原)



〈11〉

阪神大震災

私の家には阪神大震災のグラフィックが7冊あります。本屋で見付けると反射的に買ってしまったものです。そして、今でも時々ふと取り出してはページをめくりまわります。するとあの現場の記憶が蘇ってきます。まず頭の上を飛び交うヘリの音、ときれることのない緊急車のサイレンの音、次に重いザックを自転車に乗せて何度も往復した国道の風景、2階部分が完全に押し潰されたマンション、転がった阪神電車、そして焼け野原の焦げ臭い匂い、炊き出して配られるカレーの匂い、またた営業を再開したラーメン屋で食べたラーメンの味、兄と二人きりでローソクの明りのもとで食べたロールケーキの味、さらに兄と二人きりで食べてもおこせなかったピエノの重さ。

ドーンという地鳴りと共にやってくる余震など、私の五感はずっと震え続けているように神戸に滞在した九日間が昨日のことのように蘇ってくるのです。

まで神戸を自分の故郷と認識したことなど一度もなかったのに、震災で見る影もなくなるほど破壊された神戸を見たとき、久しくあつていなかった親友の突然の死を知らされたような衝撃と過去の忘れかけていたつらさ、あの日と自分の故郷として認識できなかったのではと思ってしまう。しかし、あの日と共にしたこと、今では再生神戸も自分の故郷としてしっかりと受け止めることができるような気がします。(松本)

大震災

は、おそろしくもう一度と経験できないことではないでしょうか。神戸を故郷に持つ者として地震の直後に神戸に行けたことは大変幸せだったと思つていました。これからは、震災を乗り越えて、再生神戸を自分の故郷として認識できなければ、今必死で復興していかなくてはならない気がします。(松本)

震

これを書き出すと原稿用紙百枚あっても書き尽くせません。そんな時間もありません。しかし決して忘れることは出来ません。あの日と自分の故郷として認識できなかったのではと思つてい

〈12〉

Y-NAC カレンダー

Y-NAC 文庫目録 1995. 1~95. 6

主な取材記事

- ★ **翼の王国** No.307, 1995年1月号 P 54~57
「木」の国の住人たち「屋久島できました。」ライターがあちこちでとったボラ写真にコメントが付く。P 56 左下に S. Ichikawa さんの姿が。ほかにもフミヒロさんと栗生小の子供ちと顔見知りが大勢でてる。
- ★ **旅** 1995年7月 P 45~51
「屋久島エコツアーワークク体験記」本く仁子 イラストレーター本く仁子さんによるお人柄の表れたルポ。あのほんわりしたイラストで描かれる屋久島の風景、サンゴを語る松本、かわいいう市川、イヌピワを持つ小原の手。「しっかりしたガイドの市川さん」のポイントが高い。
- ★ **読売新聞九州版** 1995年5月21日号 P 20, 「森と人と」 YNAC 内部で評価の高かった1面特集記事。短期の取材ながらうまくポイントをおさえ、かなり正確なニュアンスを伝えてくれている。こけむした巨大切株を解説する写真がしぶい。(ぜいたくをいうと全国版でなかったのが…)
- ★ **執筆記事**
- ★ **国立公園** 第530号 1995年1月号 P 20~25
「屋久島におけるエコツアーの現状と課題」(市川) 屋久島のエコツアーについて、まじめに考えたい人のための文献。
- ★ **生命の島** 第33号 P 24~25
「T T X の恐怖 タコを侮るな」(松本) これはおすすめ。ぜひご笑読ください。
- ★ **同** P 59
環境庁歴代レンジャーからの手紙「役人の目、生活者の目」(市川)
- ★ **生命の島** 第34号 P 21~23
「YNAC の来た道 行くところ」(松本)
- ★ **毎日中学生新聞** 「自然は楽しい」時々連載中 (市川)
- ★ **アウトドアウェア&イクイップメントマガジン** Vol.1, 1995年5月号 P 89
「シーカヤック マリーントレール」ファイル2 YAKU SIMA (市川)
一瀬周辺のシーカヤックガイド。
- ★ **岳人** No.576 1995年6月号 P 48~49
「とっておきの花の山旅」
屋久島~スダジイとヤッコソウ (小原)
各山から自慢の花々が紹介される中で、へそまがりにも照葉樹林を紹介。今年の圧倒的な新緑への感動がストレートに表れた名作だ、と本人は主張している。
- ★ **FIELD & STREAM** 1995年7月号 P 79
「夏の計画 野山編」
白谷雲水峡のフォレストウォーク(小原) 囲みのちょい記事。

- ★ **書籍**
- ★ 「屋久島の旅 Q & A」小田原直子、八重岳書房、1994年9月
島内ひととおりの聞き書き本ではあるが、今までこの手の親切な出版物が無かっただけにけっこう出回っている。YNAC も P 62, 70 あたりに登場しており、社屋と社用車のプランカ・ナミテの雄姿も載っている。 ¥820
- ★ 「絵地図 屋久島」村松 昭、アトリエ77、1995年6月
これまででない感性で屋久島を絵地図仕上げた大好評の逸品。インテリアに、プレゼントに最適。Y-NAC で絶賛発売中。お申し込み頂ければ Y-NAC から郵送にて販売致します。 ¥1200

2月
5日 屋久町雪祭り 市川へス
キーの指導にあたる
9~20日 YNAC ボルネ
オ研修

1月
4日 仕事始め 水産庁広報
ビデオの取材
17日 阪神大震災
18~26日 松本 神戸へ向
親・兄の救済に飛ぶ

4月
2~6日 市川、結婚10周年
ハウステンポスツアー
21~24日 旅取材
本さん屋久島エコツアー体験

3月
なんだか忙しくて
ボルネオ研修報告
なかなかまとまりません

3月
7~9日 国立環境研究所
屋久島で「自然生態学セ
ミナー」開催
YNAC も講演

5月
19日 屋久島高校スライド
講演会
松本、屋久島の海につい
て講演

編集後期

キナバルのような熱帯高地は常春と言われる。ハワイは常夏、とすればグリーンランドなどはさながら常冬でも言うのであろうか。とそこまで考えて、はたと行き詰まった。常秋がないのである。そう、秋は終りの季節。春が来なければ秋は来ない。YNAC の通信が常春と言われるよう次号もご期待下さい。(キ)

梅雨時は骨休めの期間。執筆編集にこそしめ、また友人とゆつくり語り合い酒を飲む。ところが今年はどうしたところか、ワイバーも効かぬ豪雨の中、緑ほとばしる白谷の森を歩き回る毎日となり、そのまま夏に突入してしまっただけ。まあいいのだ。じきに私は特別休暇をとり、しばらく優雅に家事を楽しむのである。ふんふん。(ウ)

仕事の後のビールがうまい。と、つい飲みすぎ原稿書きは後回し。そのツケが今頃回ってきたのか、ビールを片手に必死の編集作業で残業。今年の夏もなかなか手ごわい。日焼けでかゆい背中を定規で掻きながら、パソコンのキーボードをたたいていきます。YNAC の通信いよいよ2号の発行です。ながらくおまたせしました。(た)

YNAC 第2号
ファイナックつうしん
発行 (有) 屋久島野外活動総合センター
住所 〒891-42 鹿児島県熊毛郡上屋久町
宮之浦 2446
電話 09974-2-0944

